

XII 志教育と日々の学習活動との関連

1 イメージ図

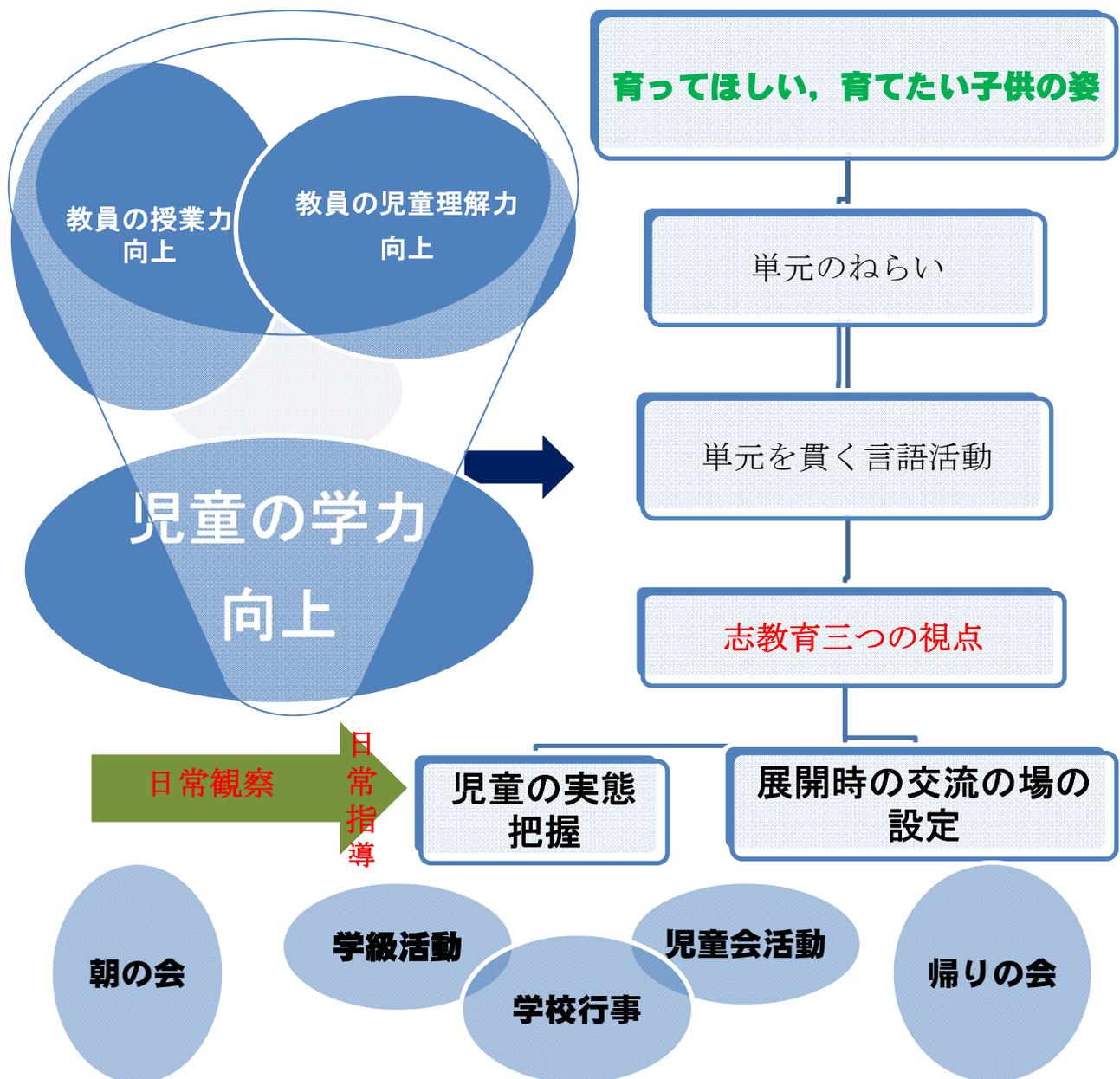
研修主題

自分の思いや考えを進んで表現する児童の育成

～ミニ授業研修を大切に、授業展開に志教育の視点を意識した国語科の授業作りを通して～

研修目標

ミニ授業研修体制を推進しながら、授業展開に志教育の視点を意識した
国語科の授業作りを通して、自分の思いや考えを進んで表現する児童の育成の在り方を探究する。



上記のイメージ図についての概要説明を次のページに記述する。

2 「1 イメージ図」をはじめとする各種構想等と国語科に志教育の視点を意識するまで

本校の児童の実態（課題等）を踏まえて設定した

研修主題

「自分の思いや考えを進んで表現する児童の育成」

及び副題

「～ミニ授業研修を大切に、授業展開に志教育の視点を意識した国語科の授業作りを通して～」

に、一連の流れの概要をコンテンツとして再度記述する。

1) 私たち教員が指導力のより一層の向上を図ることは、教員としての真摯な研修である。

(研修の視点4)

- イ 指導力の向上をより一層図ること。
 - ・ 教員の授業力の向上に努めること。
 - ・ 教員の児童理解力に努めること。
- ロ 教員としての基礎基本共通理解事項の再確認を図ること。

2) 国語科は全ての各教科・領域の基礎的・基本的教科である。

(研修の視点1, 2)

- イ 全学習活動の基本として、「言語活動」を充実すること。
- ロ 単元を貫く言語活動を熟慮して、設定すること。
- ハ 評価の新しい観点で、評価規準を設定すること。
- ニ 単元の目標と評価規準の整合性を図ること。
- ホ いろいろなスタイルの交流の場を設定する。

3) 宮城県が進めている「志教育」について研修を深め、日々の学習活動を振り返る。

日々の学習活動及び日々の学校生活で、志教育の精神を理解して教育活動を推進しているか振り返ることが大切である。

4) 全て各教科・領域等の基本となる国語科の学習に、「志教育」の視点を取り入れることができないかを研修する。 (研修の視点3)

イ 「志教育」の精神（方向性）を熟慮し、研修すること。

- ・ 志教育三つの視点のねらいとする精神の方向性を把握すること。

「人とかわる」

「自己理解や他者理解の深化、人間関係の構築力・社会性の育成」

「よりよい生き方をもとめる」

「学ぶ意義の実感、自らの在り方・生き方の主体的探究」

「社会での役割をはたす」

「自分のはたすべき役割の認識、自己有用感の高揚」

ロ 志教育の三つの視点の精神（方向性）を国語科の学習で教員が意識すること。

- ・ 単元及び教材の選定を行うこと。
- ・ 選定した単元及び教材の何時間目（X時間目）を志教育で教員が意識できるか再度選定を行うこと。
- ・ 再度選定した「X時間目」のどの場面で志教育の視点（精神及び方向性）を教員が意識することができるかを踏まえて再吟味すること。

ハ 志を育むための手立てを熟慮すること。 (具体例は、各学習指導案参照)

- ・ 場の設定の工夫を図ること。
- ・ 指導法の工夫を図ること。

ニ 道徳の授業とは違うことを認識すること。 (研修の視点3の設定理由参照)

- ・ 授業のまとめのところで、教員が意識して志教育の思いを教材から離れることなく語り掛けること。道徳の価値の一般化にはしないように留意しなければならない。

5) 学校経営方針・運営方針，研修全体計画及び志教育全体計画との整合性を確認する。

6) 志教育と日々の学習活動との関連を押さえる。

上記の「1) 私たち教員が指導力のより一層の向上を図ることは教員とし

ての真摯な研修である。 から 5) 学校経営方針・運営方針，研修全体

計画及び志教育全体計画との整合性を確認する。」を志教育中心でイメージ化したものがこの章の「1 イメージ図」である。

学習における全ての各教科・領域等で志教育を推進する上で、「国語科の適切な単元・教材・場面」を選定して学習を進めることを「志教育的実践力の育成の一助」と呼ぶならば，日々の学校生活における「朝の会，学級活動，児童会活動，学校行事，帰りの会等」は「志教育的実践の指導の場」であると捉えてはどうだろうか？

国語科の学習を通して，志教育の精神（方向性）を教員は意識し，児童は意識することなく授業を展開することにより，児童の思考に「**具体的なものの考え方や見方**」が身に付くことを願っている。

その成長や変容等は，「朝の会，学級活動，児童会活動，学校行事，帰りの会等」をはじめとする実生活で生きてはたらい（働いて），表現されて初めて見取ることができ，教員も児童も保護者も児童一人一人の小さな成長を感じる事が確認することができるのではないかと考える。
成長の具体例は，成果と課題のところで記述する。
これは，言語活動が本来ねらっていることに相通じることではないだろうか。